びわこ文化公園植物だより〔β版〕

ノシラン　クサスギカズラ科

・学名 *Ophiopogon jaburan*

・園内に植栽

　公園内を散策していると、地上近くの長細い葉の集まりの中に、とてもきれいな瑠璃色の種子が沢山ついているのを見つけました。ノシランの実です。

ノシランの種子。12月（左）と1月（右）。

ノシランはクサスギカズラ科ジャノヒゲ属に属する常緑性の多年草です。クサスギカズラ科は同じ科内にアスパラガスやスズランなど身近な植物を含んでいます。また、名前に「ラン」という文字がついていますが、ユリに近い種で、以前はユリ科に含まれていました。

自生種は東海地方より西側、四国、九州、琉球、朝鮮などに分布し、海に近い林の下に生息しています。内陸部では、グランドカバー種として、植栽されることも多くあります。葉は幅が1.5cm、長さ50cmほどもあり、ジャノヒゲやヤブランなどの同じ仲間の中では最大となります。ジャノヒゲやヤブランなどもグランドカバー種として利用されているそうです。

ジャノヒゲ属の学名 *Ophiopogon* の由来はギリシャ語の「*ophio*（蛇）＋ *pogon*（ひげ）」が語源となっています。ですが、蛇にひげは無くどうしてこのような名前になったのか疑問が残ります。実は、蛇のヒゲを表すのではなく、異なる言葉が変化してできた種名だと分かりました。日本の伝統芸能である能に使われる尉面（老翁のための仮面）の鬚（ひげ）に似ていたことから、元々はジョウノヒゲと呼ばれていましたが、その後、ジャノヒゲに変化していったとされているそうです。

花期は7-9月。花柄の中部より上に関節があります。花被片は白色または淡紫色で広披針形、長さ約6mmで、種子は倒卵形の瑠璃色で長さ9-10mm程度となっています。

ノシランの種子にあたる部分はパルプ状になっており、12月初めから緑色を呈し、1月ごろから鮮やかな青色になります。青い実はブルーベリーのような果実があるように感じられますが、果実ではなく、種子の皮が青い色なのです。

ノシランのつぼみ

ジャノヒゲ属植物は、開花まもなく子房壁（果実の元）が脱落し種子が露出するため、花序軸がぶら下がるように種子が着生します。植物の果実の先端には必ず花柱のあとが突起やへそや黒い点などとして残っていますが、ノシランの実の先をいくら見てもそれがないため果実ではないことがわかります。

ノシランと同じ仲間のジャノヒゲは古くから漢方として利用されてきました。「麦門冬湯」という名前で、根の部分を乾燥させお茶として利用する方法が行なわれて

おり、漢方の古典といわれる中国の医学書「金匱要略（きんきようりゃく）」に収載されています。現在でも、多くの製薬会社の製造する漢方に同名称で使用されています。効能としては、粘膜や気道を潤し、からだに栄養を届ける機能を高める働きがあるそう。それにより、からぜきや、痰が切れにくく、のどにからんだりするときの咳、気管支炎に効果があるといいます。

私たちの身近にある観賞用の植物が薬としての役割を持っている事には驚きます。雪も降り、厳しい季節となりましたが、漢方などから植物の力を借りて元気に過ごしていきたいものですね。

（龍谷大学先端理工学部・桒原萌葉）

❁ ノシランは園内の ここ で見ることができます。（クリックで Google マップにリンク。10m程度の誤差が出ることがあります。）